

外国の文化的背景をもつ 子どもたちをサポートする学生 NGO

世界の子どもと手をつなぐ学生の会

学生の団体として初めて東弁人権賞を受賞した「世界の子どもと手をつなぐ学生の会（CCS）」の代表・中西久恵さんにインタビューをした。とても学生とは思えないほどに秀でた行動力、人権感覚にただ驚嘆するばかりであった。

(聞き手：中島美砂子)

<プロフィール>

1993年創設。八王子市内で在住外国人の子どもたちを支援しようと大学生が設立したNGO。地域に暮らす外国の文化的背景をもつ子どもたちのための支援事業を行なうことを目的とする。子どもたちへの教科や日本語の学習、進学のための支援やメンタル面の支援を行ない、エンパワメントを促進し、受け入れる側の日本の子どもたちへの国際理解のための活動にも取り組んでいる。現在、首都圏で41大学の約220人の学生が、230人の小中高校生の支援活動を行なっている。具体的には①学習教室、②派遣サポート、③メンタルサポート、④イベント、⑤事例検討会・研修会の5つの活動を行なっている。CCSはClub of Children and Students working together for multicultural societyの略。



中西 久恵さん

——今回の受賞について感想をお願いします。

中西：過去の受賞を見ると、知名度の高い団体が多いですし、今回初めて学生が受賞したとのことですので、嬉しい以上にびっくりしたというのが正直な感想です。

——どのような活動を行なっているのですか。

中西：東京都内で生活する外国の文化的背景をもった子どもたちのサポートをしています。具体的には、学習支援、メンタルサポート、エンパワメントの3つが活動の柱です。

——子どもたちへの学習支援では、どのようなことを行なっているのですか。

中西：来日して間もない子どもに日本語を指導するほか、国語・算数・理科・社会といった教科学習をサポートしています。また、12～15歳くらいの子どもの来日することが多く、日本に来て2～3年後に高校受験を迎えるので、受験のサポートが必要になります。

——外国から来た子どもたちは学校の授業についていけるのでしょうか。

中西：日本語が十分に理解できない子どもはもちろん難しいです。また、両親のいずれかが日本人である子どもたちは、日本語での日常会話は問題がないのですが、教科学習となるとついていけない場合もあります。教科書に出てくる言葉、例えば、算数の「分数」という用語とか、社会科で出てくる用語が理解できないのです。また、「にもかかわらず」といったような日常会話ではほとんど使われないような表現もわかりません。

また、子どもたちが日本語での日常会話に支障がなくても、親が日本語を理解できない場合も少なくありません。そういう親は、子どもが学校で使用している教科書もほとんど読めませんから、子どもが家で勉強しているときにわからないことがあって聞こうとしても、親は教えられません。そうすると、子どももわからないままになってしまいます。学校の先生も、日本語が話せるのに勉強できないのはサボっているからだと考えてし

まいがちです。しかし、こうした子どもたちは、日本語を話すことはできても、教科学習に必要な用語を習得するレベルに達していない、そのことに誰も気がついていないのです。こうした実情から、私たちは、マン・ツー・マンで子どもたちに学習支援を行なっています。

——メンタルサポートでは、子どもたちの話を聞くことが中心となってくるのでしょうか。

中西：そうですね。子どもたちは、国際結婚した両親の関係がうまくいっていない、親が働いていて家にいない、学校でいじめを受けているといった悩みを抱え、孤独を感じています。話を聞いてもらえる私たちがいるというだけで、子どもたちの気持ちもかなり違うようです。また、子どもがいじめにあったことを学校に訴えても、学校から何も反応しないときは、私たちが学校と交渉することもあります。

——親や学校と連絡を取ることもあるのですか。

中西：はい。私たちは、家庭と学校と子どもの間に入って連携を取ることに努めています。学校ではまだまだ敷居が高く、なかなか私たちの思いを受け入れてもらえませんが、少しずつ認めていただいているようです。最近では、外国の文化的背景をもつ子どもが入学してくると、学校の方からサポート依頼をされることもあります。やはり学校もこうした子どもへの対応が難しいと感じていると思います。

——エンパワメントとしては、どのような活動をされていますか。



中西：CCSの一番大きなイベントとして、毎年12月に開かれるイヤーエンドパーティーがあります。これは、学生と子どもたちが一緒に企画して、子どもたちが母国の文化を紹介しあいます。例えば、子どもたちが母国の料理を紹介したり、母国のダンスを踊ったり、また、日本の詩をそれぞれの母国語で子どもたちが読みあったり、まさに「多文化空間」という感じですね。母国の文化について否定的な子どもたちも少なくないのですが、私たちは、こうした母国の文化を発表する機会を通じて、子どもたちが母国、自分のルーツに対して誇りを持ってほしいと願っています。

——多くの大学生は、家庭教師のアルバイトとして、比較的高額のアルバイト料をもらっていると思うのですが、CCSの皆さんはボランティアとして活動されているのですね。

中西：私も普通の家庭教師のアルバイトをしていたことがあります。教えることに対してアルバイト料をもらうよりも、CCSを通じて子どもたちと接したことによって得られるものの方が大きく、やりがいを感じています。例えば、先ほどのイベントで、それまで母国の文化に否定的な子どもが、母国の料理を皆に紹介して「上手、おいしい」と誉められたことがきっかけで、母国のことを積極的に紹介するようになるといった変化が見られると、私たちもとても嬉しくなります。

——これからの抱負を聞かせてください。

中西：子どもたちは、親に連れられて日本に来たのであって、自分の意思で日本に来たわけではありません。そして、日本に来てみると、学校ではマイノリティーとして孤立しがちであり、また家でも淋しい思いをしたりと、彼（彼女）らにとって居場所が無いというのが現状です。また、親が離婚したという辛い経験をしている子どもたちも少なくありません。私たち日本の大学生は、子どもたちよりずっと恵まれた生活をしてきており、どれだけ子どもたちの気持ちを汲み取れるのか、何もできない無力さを感じることもあります。これからも少しでも子どもたちのための居場所作りができればと思います。

（構成：中島 美砂子）